



洞本業窯

王子窯モロ

歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見 せと 歴史と文化財を知る見学会 「本業焼の窯場を訪ねる」

主催：瀬戸市・(公財)瀬戸市文化振興財団

日時：令和4年7月9日(土)

見学コース：①午前9時30分

(予定時間) 9時35分
9時50分
10時30分
10時50分
11時00分
11時30分

②午後1時30分

1時35分
1時50分
2時30分
2時50分
2時00分
3時30分

窯垣の小径駐車場集合
窯垣の小径散策開始
洞本業窯到着(瀬戸民藝館)
窯跡の杜へ出発
王子窯へ出発
王子窯到着
窯垣の小径駐車場解散

瀬戸市域の主な指定・登録文化財

本地大塚古墳(西本地町2丁目)

宮地古墳群(上之山町2丁目)

広久手30号窯跡
木造十一面観音菩薩立像(下半田川町) 県
木造阿弥陀如来立像(下半田川町) 県

古瀬戸瓶子(寺本町)

陶製狛犬(深川町) 国

瀬戸窯跡【小長曾窯跡】(東白坂町) 国
永享年銘梵鐘
聖徳太子絵伝(塩草町)

定光寺本堂(定光寺町) 国
織田信長制札(窯町)
菱野郷倉『大般若経』[一部鎌倉]
瀬戸窯跡【瓶子窯跡】(尻山町) 国
源敬公廟(定光寺町) 国
笠原村・両半田川村国境争論絵図(東松山町)
石造地藏菩薩立像(片草町)

陶質十六羅漢塑像(寺本町)
六角陶碑(藤四郎町)
旧山繁商店(仲切町・深川町) 国登
瀬戸永泉教会礼拝堂建造(杉塚町) 国登
陶製梵鐘(深川町)

瀬戸市域の主な指定・登録文化財		やきもの生産の変遷	
古墳	5世紀	飛鳥	須恵器
	6世紀		
奈良	7世紀	奈良	須恵器・ 灰釉陶器
	8世紀		
	9世紀		
平安	10世紀	平安	灰釉陶器 山茶碗・ 古瀬戸
	11世紀		
	12世紀		
	13世紀		
鎌倉	13世紀	鎌倉	大窯 製品
	14世紀		
南北朝	14世紀	南北朝	連房 製品
	15世紀		
室町	15世紀	室町	連房 製品
	16世紀		
戦国	16世紀	戦国	連房 製品
	17世紀		
安土・桃山	17世紀	安土・桃山	連房 製品
	18世紀		
江戸	18世紀	江戸	連房 製品
	19世紀		
	20世紀		
近代	(明治)	近代	大窯 製品
	(大正)		
	(昭和)		

今回見学する文化財とその関連年表

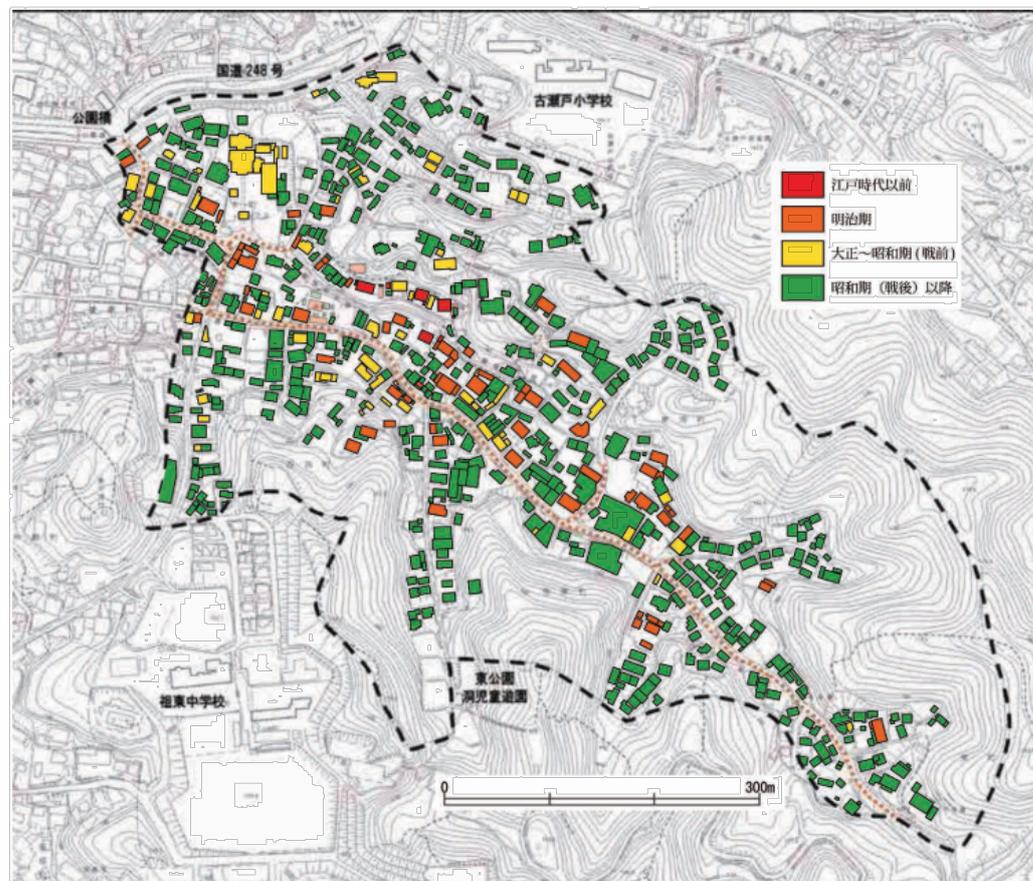
洞窯操業開始
東洞A窯操業開始
王子窯モロ建設

瀬戸市景観重点地区（洞地区）の概要

瀬戸市は、平成12年に「やきものづくりの伝統と文化が薫る美しく誇り高き洞地区」を目指して、瀬戸市景観計画に基づいて右上図のように洞地区を瀬戸市景観重点地区に指定しました。

また、同地区内では地域の良好な景観を守り、育むという観点から重要な建造物として、右上図に示すように、10件が「景観重要建造物」として指定されています。

今回訪れる洞本業窯（窯体）や王子窯モロ（2階建建造物）は、瀬戸市指定文化財（建造物）であるとともに、洞本業窯（窯体・モロ・資料館（ギャラリー））や王子窯重油窯煙突は景観重要建造物となっています。



瀬戸市景観重点地区（洞地区）における建造物の年代
 （登記年代を参考に建築様式により年代比定）
 （瀬戸市文化遺産活用実行委員会 2016 『瀬戸市歴史的建造物実測調査報告書』より）

窯垣の小径

洞地区には、かつてやきもの生産に使われた「ツク」・「エブタ」・「エンゴロ」といった窯道具を埋め込んだ塀を伴う、全長 400 m ほどの細い道があります。「窯垣の小径」と呼ばれるこの道は、かつて窯業生産で栄えた洞のメインストリートであり、窯場で働く人たちが、陶磁器や燃料を運ぶために往来した汗の道でもありました。

窯垣が確認できる最も古い資料は、幕末～明治に刊行された「尾張名所図会」に掲載されている「瀬戸陶器職場」の図ですが、窯垣が作られ始めた年代について詳しいことは分かっていません。ただ、窯道具が大量に不要になったのは約 100 年前（明治末～大正）の登窯から石炭窯への転換期と戦時中の企業整備による窯屋の大量の転廃業、そして昭和 20 年代～40 年代の登窯の終焉期が考えられ、それを契機に窯垣が多く築かれ、今の姿になったと思われます。



窯垣の小径

洞本業窯（市指定文化財（建造物））

窯垣の小径を抜け、さらに南東に進むと「洞本業窯」に辿りつきます。この窯は現在の「窯跡の杜」に存在した巨大な窯、「奥洞窯（東洞 A 窯）」を昭和 23 年に解体し、翌 24 年に今の場所に移築したもので、その時にモロや倉庫も一緒に再構築されました。なお、一里塚にある本業窯も同じく東洞 A 窯の部材を使って移築されたものですが、現在の瀬戸でこのように登窯の窯体が残されている例はほとんどなく、極めて貴重な資料であるため、いずれも市の指定文化財となっています。窯の規模は全長 14m、最大幅は 7m で、3 口の焚口と胴木間（燃焼室）・捨間、そして製品を焼成するための 4 つの焼成室とコクド（煙道部）からなります。この窯で製品を焼成するのにかかる日数は 7 日間といわれており（前身の奥洞窯（東洞 A 窯）では焼成に 200 時間、冷却に 240 時間かかっていた）、昭和 54 年までは実際にこの窯で生産が行われていました。その当時の主力製品は水甕やこね鉢で、年に数回焼成をしていました。

ここで窯を営む水野半次郎家は江戸時代から続く窯屋で、当代で 7 代目になります。現在も昔ながらの瀬戸の本業焼の製法にこだわり、成形はロクロ水挽きを中心とし、絵付は麦わら手や陶胎染付などの伝統的な文様を手がけ、釉薬の原料の木灰は自家精製するなど、その調合などにもこだわっています。また、併設された資料館「瀬戸民藝館」では、洞地区をはじめ瀬戸市で江戸時代中期以降につくられてきた器を中心に紹介しています。



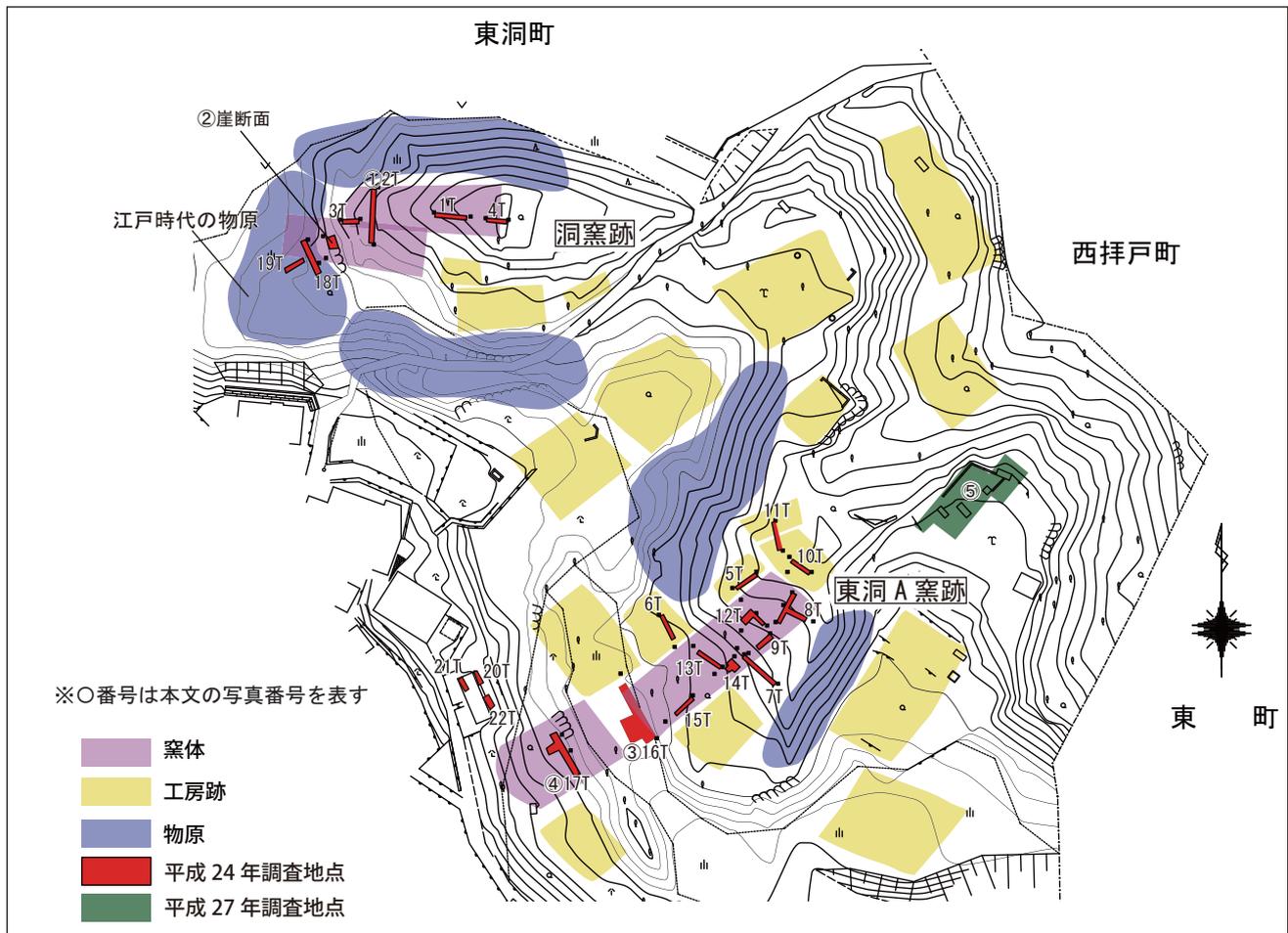
洞本業窯

洞窯跡・奥洞（東洞 A）窯跡

洞本業窯の北側の丘陵は「窯跡の杜」と呼ばれ、江戸時代から近代にかけて操業した巨大な連房式登窯や工房があった場所になります。平成 24 年に確認調査を行い、窯体の位置や遺存状況が確認され、また、平成 27 年には工房の 1 つが調査され、操業当時の様子が明らかにされました。

平成 24 年の調査は、小さな調査区（トレンチ「T」）を 21 か所に設定して行い、「洞窯跡」と「奥洞窯跡（以下、「東洞 A 窯跡」）」の 2 つの窯体を確認しました。洞窯跡では 1T～4T で連房式登窯の床面が確認され、その規模は、推定で全長 25m、最大幅は 6m 以上になり、製品を焼くための焼成室は 12～13 房であったと思われます。また、窯体を確認された斜面の西側の調査区（下図「崖断面」）では、さらに下層に操業当初の窯体が埋もれている状況が確認できました。窯体の西側に設定した調査区（18T・19T）では、本窯で生産された製品が大量に出土しており、この付近が焼成に失敗した製品を投棄した、いわゆる「物原」であったと思われます。物原から出土した遺物は基本的に陶器で、古いもので 18 世紀中頃のものがみられたことから、少なくともその年代には本窯の操業が開始されたと考えられます。これに対して、窯体内から出土した本窯の最終焼成品は、幕末にあたる 19 世紀中葉の磁器の碗皿類であったことから、洞窯の操業は約 100 年間行われたことがわかりました。

東洞 A 窯跡は、昭和 11 年発行の『登窯二關スル調査報告書』には「洞奥窯」として記載されており、それによると窯体は陶器を生産した本業窯で、13 房の焼成室からなる長大な窯で



窯跡の杜の地形と登窯の位置

あったとされています。調査では残念ながら焚口部分の基礎が確認できたに過ぎませんが、周辺から出土した遺物や地元の方のご教示から、本窯が江戸時代末期から操業が開始され、戦後の昭和23年まで続けられたことがわかっています。また、東洞A窯跡があった窯体のさらに南西下方（17T付近）では別の窯体が良好に残存していることがわかりました。全体の規模や操業年代は不明ですが、近接した場所に窯が密集して作られていたとも考えられます。

洞と東洞A窯跡、この2つの窯跡は複数の窯屋によって経営されていましたが、それぞれの窯屋が使用していた工房（モロ）は、今もなお周辺に残る平坦な地形にあったと考えられます。平成27年の調査では、近世・近代に使われたモロの状況が明らかにされました。モロを構成するのは煉瓦造りのプーリー（モーター動力をモロ内に伝える滑車）台と、それと連動したであろうスタンプ（陶土を粉砕する装置）や土練機（粘土を練り合わせる機械）とみられる基礎部分の他、釉薬を調合するためのトロンミルの基部や陶土を溜めておくためのコンクリート槽などで、操業当時の姿を今もなお偲ぶことができます。

洞地区は、江戸時代後期から近代にかけて活況を呈した瀬戸村（瀬戸町）の中でも特に窯業生産が盛んに行われた地区でした。そして、この「洞・窯跡の杜」は、その当時の姿を知ることができる窯業遺跡の集合体といえます。元々洞地区は、江戸時代後期になって周囲の地区が磁器生産へと転換していく中、陶器生産が主流であった地区ですが、明治期以降、磁器生産に転換する窯屋が急増することが知られています。その中で、当時の様子を伝える「加藤誠一磁器工場」の写真には、おそらく陶器生産を行っていたであろう東洞



①洞窯跡 2Tで確認された窯体



②洞窯跡 崖断面で確認された窯体



③東洞A窯跡 16Tの焚口付近



④東洞A窯跡 17Tで確認された別の窯体

A 窯が写し出されています。丘陵地から洞の街を悠然と見下ろす長大な窯の覆屋は、当時の洞の象徴の一つであったと考えられます。



⑤平成 27 年調査区全景



プーリーと土練機※



スタンパー※

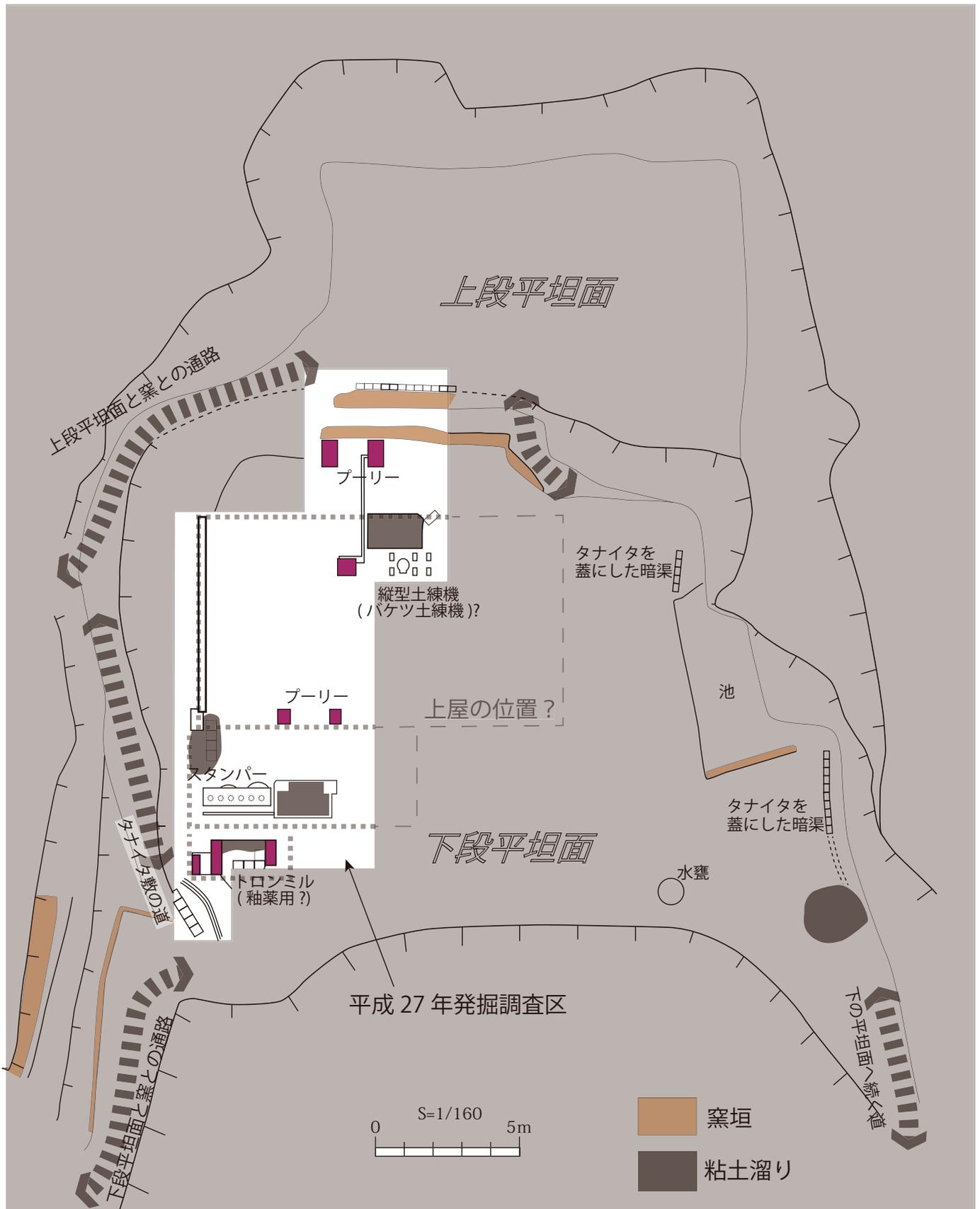


トロンミル※

※印は瀬戸蔵ミュージアム展示より



加藤誠一磁器工場（明治 43 年：○印は東洞 A 窯の覆屋）



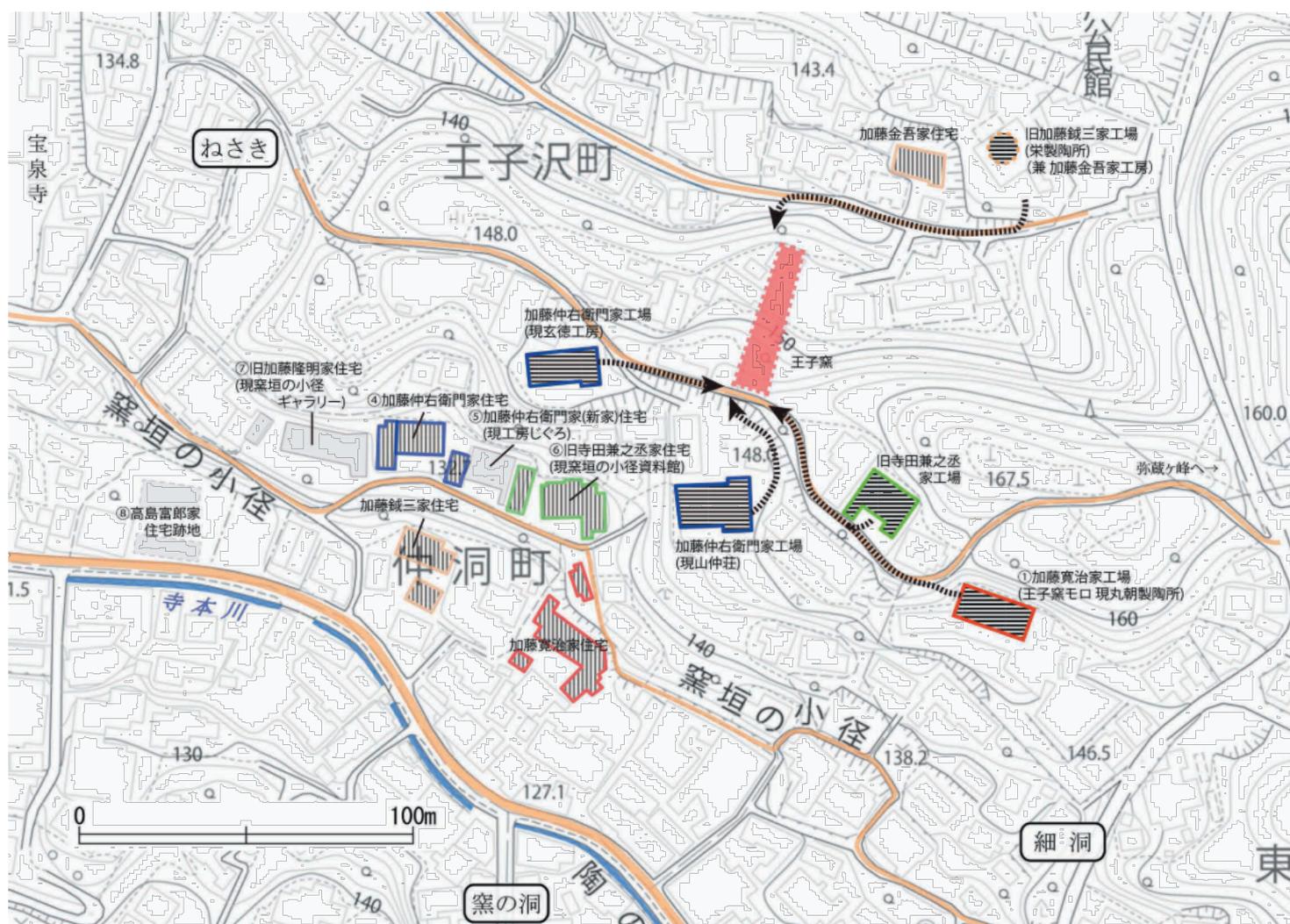
平成 27 年調査区 遺構配置と周辺地形見取り図

王子窯モロ（市指定文化財（建造物））

①王子窯の窯炉とモロの位置

洞地区のなかでも中部の仲洞において昭和43年まで13連房の登窯を焼成した王子窯は、戦後昭和30年代には、5家の窯屋が共同で窯詰めを行っていたとされます。土地所有者は加藤寛治家で、その祖父の兄の子である加藤鉞三家、寛治氏・鉞三氏の親戚である加藤仲右衛門家および寺田兼之丞家、他家の加藤金吾家とともに本業焼の焼成を行っていました。

洞地区は中央に寺本川の沢があり、北側の王子沢とに挟まれた尾根稜線の北側斜面に王子窯が築かれ、王子沢を挟んで加藤鉞三・金吾家モロ、窯の上部末端のコクド付近には西の「ねさき」から東洞の奥洞窯上部まで尾根稜線を繋ぐ道があり、加藤仲右衛門家・寺田兼之丞家・加藤寛治家の各モロが続いていました。これらの窯屋のモロから沢向いもしくは尾根伝いの道を通じて比較的容易に王子窯の窯炉へ焼成前素地を供給していた状況が下の位置図からも分かります。また、窯屋屋敷は、王子沢筋の道筋に面して加藤金吾家住宅があり、稜線上の道と寺本川筋の道の間細い道がありますが、その道筋上方に加藤仲右衛門家・寺田兼之丞家、寺本川筋道との間に加藤鉞三家・加藤寛治家の住宅が建ち並んでいました。



洞地区（仲洞）における王子窯周辺の窯場・モロ・窯屋屋敷（住宅）の位置（昭和30年頃）
（瀬戸市文化遺産活用実行委員会2016『瀬戸市歴史的建造物実測調査報告書』より）

②王子窯について

王子沢町東部の北向き斜面に所在した王子窯は、昭和43年(1968)5月を最後にその窯炉の操業を停止していますが、当時は瀬戸窯唯一の長大な連房式登窯でした。現在、窯炉は一部しか残っていませんが、物原の出土遺物から18世紀後葉以降、幕末を経て近現代まで操業されたものと考えられ、昭和30年代には加藤寛治家はじめ5つの窯屋が播鉢や甕等の本業製品をここで焼成していたと伝えられます。窯体の焚口は沢の谷部にあり、最下部の燃焼室である胴木間、捨間を経て焼成室11房が連なり、全長約70m幅約10mの窯体最後部のコクドは尾根頂部近くに至りました。

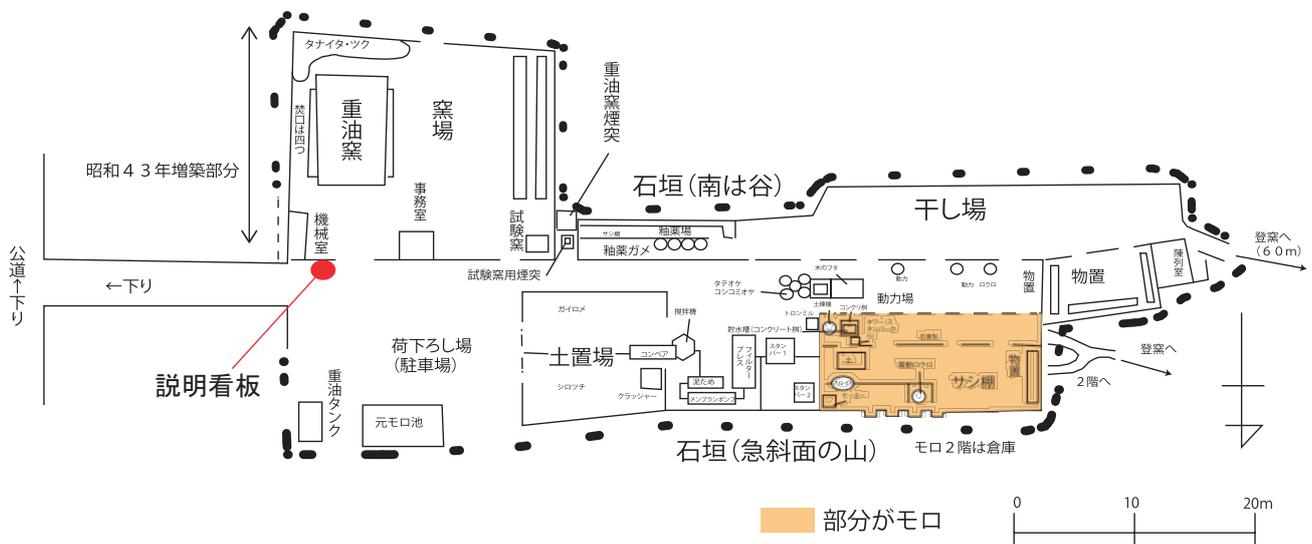
王子窯の所在した尾根筋を中心として、焼成前の素地等を成形・釉かけする工房「モロ」が建ち並んでいましたが、今日まで明治期のものに残されているのは「王子窯モロ」のみです。

③王子窯モロについて

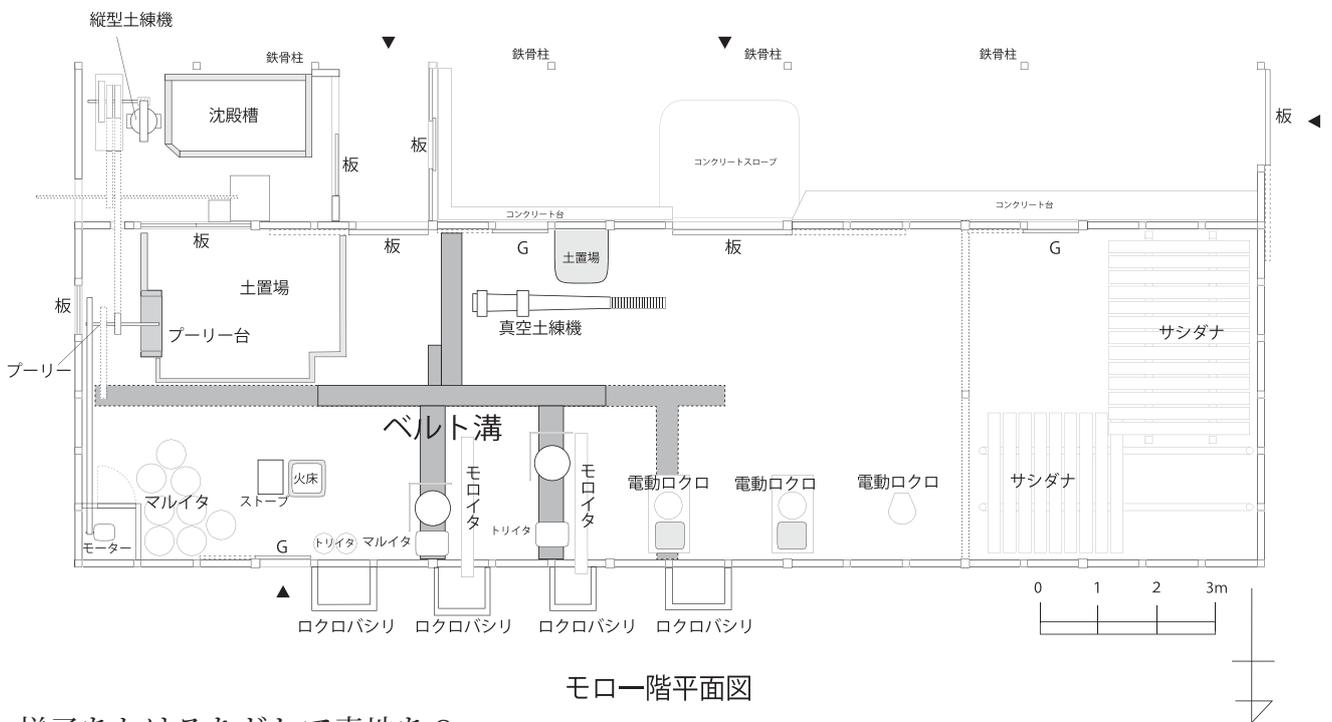
王子窯モロは、明治33年(1900)に建造されたと伝えられ、大正2年(1913)に南側の下屋を拡張したものとみられます。昭和43年に連房式登窯から重油窯に窯炉を変更した際に鉄骨造の建屋を南側にさらに増築しました。モロは、丘陵尾根近くの南向き斜面に幅20mほどの東西に細長い平坦面山際に建てられています。東西間口20間(実長10間)、南北奥行6間(実長3間)で細長く、高さ6.258mの木造2階建て平入切妻造り建物です。

1階の西、北、東面は厚い土壁を巡らし窓はほとんどなく、昼間でもうす暗い空間となっています。これは、成形前の粘土保管や製品のロクロ成形等を行う際に急激な乾燥を避ける利点がありました。北壁面に接するようにして現在使用されている電動ロクロが5か所にみられますが、かつては床下の動力ベルトを通じて3箇所以上のロクロを同時に稼働させていた痕跡が確認できます。南東床面には成形前の粘土置き場があり、西部の2間半のスペースと1階天井近くにサンダナと呼ばれるロクロ成形後の素地を置く板が設置されています。

1階で成形された素地は、南側の干し場で乾燥された後、2階の倉庫で釉薬をかけられ、窯で焼成されるまでの間保管されました。1階天井には2ヶ所の2階への登り口があり、ここに

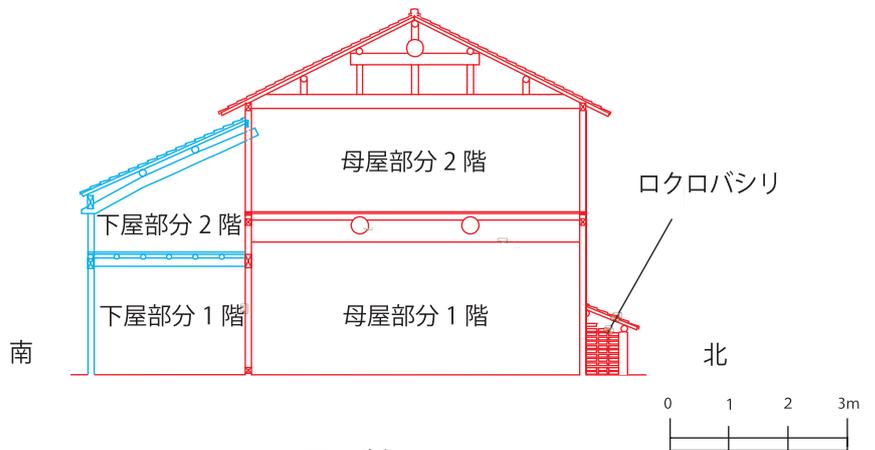


王子窯工房全体見取り図



モロ一階平面図

梯子をかけるなどして素地を2階に運び込んだものと思われます。2階は南側下屋底にも拡張部があり、素地を大量に保管することができました。2階に保管された焼成前の製品素地は、2階西側の出入口からそのまま運び出され、尾根筋を伝って王子窯の窯炉にもたらされました。



モロ断面図

このように、1階で成形、2

階で焼成前製品素地の施釉と保管を行い、焼成の窯炉までを機能的につなげる工夫が込められている「王子窯モロ」は、その建造年代においても確認されている中では最も古いものであり、文化財的価値が高いことから平成31年3月19日に瀬戸市指定文化財となりました。

王子窯モロの1階には、1基のモーターからバケツ形土練機やロクロの動力を賄ったプーリーやベルト溝などの装置もみられ、大型の真空土練機を含め、近代の窯業民俗を伝える貴重な機械・道具が存在しており、建物とともに文化財としての価値を有しています。また、その築造以降昭和期に至るまで周囲に製土・成形を行う「土置場」「動力場」等の工場建物を伴い、南側には焼成前の製品を天火干しする「干し場」、南東には連房式登り窯焼成終了後の昭和43年に築かれた4つ口の大型の重油窯がみられます。これらの建造物は、王子窯モロと一体となり明治・大正・昭和期の窯業生産の様相を今日に伝えています。



王子窯モロ（左）
と重油窯煙突（右）



王子窯モロ
1階ロクロ場近影



王子窯モロ
2小屋組近影

今後のスケジュール

<8月>

せと 歴史と文化財を知る見学会 「広久手窯跡群の発掘調査を見に行こう」

日 時：8月13日（土） 午前9時～11時・午後1時～3時

集合・解散場所：文化センター北駐車場

★定員各部 20名

瀬戸市歴史文化ホームページ

新たに瀬戸市の歴史文化に関するホームページ「瀬戸市の歴史・文化～1000年以上の歴史を誇るせとものまち 陶都瀬戸～」を開設しました。これまでに開催した「まちめぐり」の資料や瀬戸の古い町並みなどの写真、さらに昨年度刊行した瀬戸市歴史文化ガイドブック「千年続く誇りを巡る旅」、瀬戸を知るテーマ別ガイド「のんびりじっくりせとマップ」、瀬戸の百科事典「瀬戸ペディア」などが閲覧・ダウンロードできます。ぜひご利用下さい。

アドレス：<http://seto-guide.jp/>



主催：瀬戸市・(公財)瀬戸市文化振興財団